

## モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

著者	小長谷 有紀
発行年	1991-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4579">http://hdl.handle.net/10502/4579</a>

もうすっかりなじみになった4WD車が草原をすすむ。

この一ヶ月のあいだ、わたし自身、この車で町まで二度往復した。なじみの車にのり、なじみの道をたどる。それでも、草原は新しい。すっかり別の色になっている。うっすら緑をおびた若菜色の草原になっている。若い芽が、枯草のあいだから大地に接してひろがって、草原の色をしだいにぬりかえている。これがモンゴルの春本番。

車のなかで、若い通訳氏がわたしに質問する。たどたどしい英語だから、聞きまちがえることはない。「どうですか、成果は？ 満足ですか？」

わたしは声につまっていたから、簡単に首で返事をした。こたえはイエス。

「わたしにはわかります。あなたは満足ですね。あなたの目から知ります。仕事の成果がありましたよ」

たしかに仕事の成果はあった。多くの事実を見知った。この観察結果は、これからの牧畜研究にとって重要な考察材料の一つとなればよいと思う。モンゴルの共時的特徴を示唆してくれるだろう。また同時に、通時的考察つまり、人類による野生動物の家畜化過程を推論するうえでも有効であるように思わ

れる。しかし、わたしの目にあふれる満足感、仕事の成果なんかじゃない。

若い通訳氏は、いきおいこんで英語ではなしはじめた。まるで会話練習の相手をしばらくぶりにみつけたかのように。中国の教育問題をとうとうと論じた。国家の繁栄と教育、日本の文明開化、中国における教師の地位、給料の安さなどなど。とどのつまりは、みずからの転身の理由にほかならなかった。したがって、つづく論題は中国の観光産業、国家の繁栄と観光の意義、云々かんぬん。かれの話は、たしかにわたしの耳元まで聞こえてくるのに、わたしの頭のなかには入ってこない。聞いているふりだけして、わたしはわたしで、この一ヶ月のことを思っていた。

ダンゼン父さんの老いた白いウシ。モージ母さんのメスウシたち。ウジチャの緑のウマ。サラントヤ一のシャーハイ・ヒツジ。エルデニ姉さんの乳ぬすつと子ヒツジたち。セテルにした、わたしのヒツジタカはげのこと……。知り合った人びとと、その家畜たちがわたしの頭のなかをかけめぐる。

世界中の牧畜民のなかで、モンゴルほど家畜をできるだけ育て、あんなに老いるまで生かしてしまいう人びとはいないのでないだろうか。よわいものへのきびしい掟がある一方で、あたたかいまなざしのある暮らした。現地の人びとによって「生きられている生活世界」を、同時に生きることができたという思いがあふれる。そのよるこび。人びとの生活世界を同時に生きたと思うのは、錯覚かもしれない。それならそれがかまわない。わたしの錯覚をゆるしてくれた、かれらの思いやりに感謝しよう。

とにかく、さよならがせつなかつた。もっと居候をつづけたい。ただし、持参したフィルムは、一日一本の予定どおりすべてつかいきつた。フィルムなら、町でかうことだってできるから、居候をつづけようか。もし延長したら、諸関係機関に迷惑をかけるだろう。そして、なによりもこの愛すべき家に支障があったらどうしよう。やっぱり、居候はこれまでにしようか。すこしだけなやんで、きっぱりとあきらめた。

これ以上、観察をつづけて情報をふやしても、私の頭は混乱するばかり。もうすでに、何度か人びとにわらわれている。

「まえに、そのことって、聞いたじゃない。だからさあ、いったでしよお」と。

わたしにとって、いまがひきあげどきというものだ。そうあきらめた。

例のイヌが、例によって、車とならんで疾走する。こいつともおわかれたなあ。写真にとっておきたい相手なのに、ついにとらなかつたなあ。ふと気がつくとき、便乗して町へもどるラマ僧がぐったりしている。どうやら車に酔ったらしい。でも、車はとまらない。もうすぐ、アスファルトの道にでるから、あとすこしの辛抱で楽になるはず。あのなめらかな道にできれば、酔いもおさまろう。

あの道にできれば、市内までもうわずか。草原の道はもうすぐ、おしまい。時空間がワープしていた、フィールド体験もおしまい。